

# 経済分析の視角からみた

トマス・モア『ユトローピア』（下）

岩 松 繁 俊

## 三

さて、以上、モアがイングランドの現状をどのように分析したか、ということをして、できるかぎりその所論にそくして内在的にたどってきた。ここでは、モアの分析を、当時の経済史的事実とのかんれんにおいてとりあげ、その分析の意義を、われわれの問題とする視角から論ずることとしたい。

モアは、盗人発生の原因の第一として、貴族およびジェントルマンの従僕雇傭ないし解雇をあげているが、ここで従僕とは、「腰には剣と盾とをさし、いかに横柄なつらがまえでまちを横行濶歩して、まるでひとをひとともおもわれないおもいがった人間」で、「ひまで柔弱になっているか、ほとんど女のやるような仕事で軟弱になっている」ものであり、また、貴族とは、「他人をはたらかせて、みずからは雄蜂のようになまけてくらし」「地代をひきあげることによって、かれら（借地農）の生身まで切りそぐ」ものである。すなわち、貴族とは、借地農に土地を耕作させ、それからあがる地代をもって収入とし、同時に武装した従僕を飼養する階層である。つぎに、ジェントルマンとはなにか。モアは、貴族の従僕がひとたび解雇されるやふたたびかれらをやといれるジェントルマンも農民もいない、

といい、ジェントルマンがかれらをやとていれない理由は、かれらが放浪生活のうちに健康もおとろえ、衣服もやぶれて貧相になるからだ、とのべている。<sup>(61)</sup>これからみると、貴族とジェントルマンとは、従僕を私兵としてやとう階層であるという点で同一であるといえるであろう。<sup>(62)</sup>じじつ、モアは、あとの部分——その一部はすぐまえに引用した——で、ジェントルマンはえりすぐった強健な男たちをやとてい、そしてかれらを柔弱にする、とのべている。「強壯頑健なひとびとが（といえますのは、ジェントルマンはえりすぐったものしか台なしにしないからです）、いまは、ひまで柔弱になっているか、ほとんど女のやるような仕事で軟弱になっているのですが、これらのひとびとが生活してゆけるだけのりっぱな職業をあたえられ、そして男らしい労働でたえず訓練されているならば、女性的になるのではなからうかという心配はけっしてありません。adeo periculum nullum est, ne quorum ualida et robusta corpora (neque enim nisi selectos dignantur generosi corrumpere) nunc uel elanguescit ocio, uel negociis prope muliebribus emolliuntur, iidem bonis artibus instructi ad uitam, et uirilibus exercitati laboribus effoeminentur.」<sup>(63)</sup>また、モアは、ジェントルマンを、牧羊インクローシアの推進者として、貴族や大修道院長とならべてあげている。<sup>(64)</sup>かれらは、後二者とひとしく、擲出地代によって生活する階層である。

ところで、いったい、ジェントルマン階層は歴史的にどのようにとらえられるべきものであろうか。この問題にこたえることは、じつに容易なことではない。すでにドップは、「われわれは、当時〔封建制解体〕と一六世紀後半とのあいだに介在する時期における経済制度をどうよぶべきであらうか。その時期は、われわれの年代設定によれば、その生産様式にかんするかぎり、封建的でもなく、また資本主義的ともまだいえないものであったようにおもえる。<sup>(65)</sup>」とのべて問題を提出した。モアの時代は、経済史的にみれば、まさにこの問題おおい移行期にくらいしいたのである。そしてこの時期におけるジェントルマンこそ、われわれが究明しようとするものにほかならない。

まず、この時期におけるジェントルマンの語義をしらべてみよう。ジェントルということばは、もともとノーブル noble とおなじ意味をもっていたが、これらが区別してもらいられはじめたのは一三世紀初葉からであった。そしてジェントルマンとはジェントルなうまれのものを意味したのである。しかしこれにもいくつかのニュアンスをもった意味がかんがえられる。

〔I〕 ジェントルなうまれのもの、またはそれと同等の紋章上の地位をもったもので、貴族（ノーブルマン）よりも地位のひくいもの、というのが本来の意味であり、また、ときには、厳格に地位を規定するのでなく、ひろく貴族もふくめた高貴のひとの意味にもつかわれた。貴族のしたの階層としてのジェントルマン、および貴族をふくめたよい家柄にうまれたものとしてのジェントルマンの用例を一六世紀はじめまでにもとめてみよう。<sup>(66)</sup>

(a) 貴族とジェントルマンとは荷物ひとつはこばない。 Noble men and gentile ne bereð nout packes. Ancren riwle. 一二二五年以前。

(b) ああ、貴族とジェントルマンとたかい家柄なうまれのかがたは、しゅっちゅう愛人をいとまたやすく手にいれななる。 Ah noble men and gentile and of heh burðe ofte winnen lue liltliche cheape. Wohnunge in Cotton Homilies. 一二四〇年以前。

(c) またもとむれの身となつたのをかれがしたところのジェントルマンたち……かれらをかれはふたたび身受けた。 Gentil men þat he vond in prison ek yðo……he bo;te hom out also. Robert of Gloucester. 一二九七年。

(d) 金持ちのジェントルマンが盗人から強奪された。 A riche ientilman wes y-robbed of pieues. Ayeenbite of Inwyrt, Dan Michel's. 一三四〇年。

(e) アダムがたがやし、イヴがつむいだとき、だれがジェントルマンであつたか。 When Adam dalf and Eve span, Who was thanne a gentilman?<sup>(67)</sup>

(f) これらふたりのりっぱなジェントルマン Hercules と Jason とは、同僚をはみばし、領土をえた。 These two worthy Gentlemen Hercules and Jason overthrew their felaws and gate the felde. Caxton, Fason.

一四七七年ごろ。

(g) そして Poule は尊敬すべき家柄にうまれたジェントルマンであつたから、かれらは、かれのあたまをなぐつた。 And Poule for he was a gentylman borne for the more worshype they smote of his heed. Fostivall (W. de Worde.) 一四九三年。

ジェントルマンの地位をしめすために、その名称またはその省略形を、名前につけくわえた。たとえば、

(d) ジェントルマン John Stathom, ジェントルマン William Belasys には……智慧がある。 John Stathom gentilman, William Belasys gentilman……beris witness. Surtees Miscellanea. 一四八一年。<sup>(68)</sup>

のじこくである。

〔II〕 ジェントルなうまれのものうち、君主やその他高位のひとにつかえているもの、<sup>(69)</sup> という意味にもつかわれる。このばあいにはそれを規定することばがつくのがふつうである。若干の例をあげよう。

(i) わたくしの領主の修道院長のところへ役人としてきてはでてゆくどのジェントルマンも、わたくしの友人の家にきたがっている家事手伝人も同様です。 Item to eu'y gentylman of my lord abbotte wiche be comyng and goyng as officeres and menyal men longyng to the household of my felashepe. Bury Wills (Camden.)

一四六三年。

(j) 女王づきの料理室のジェントルマン Richard Brampton < To Richard Brampton gentleman of the pantry with the Queene. Privy Purse Expenses. 一五〇三年。

(k) 宮廷のジェントルマンとロンドン伯爵家のジェントルマンとが、であっていっしょにあそびにでかけた。

The gentlemen of the kynges household and the gentlemen of the Erles household of London after meet wente togyder for to play. Caxton's Chronicle of England, III. 一五二〇年。

〔Ⅲ〕 ジェントルなうまれのものでも、しかもそれにふさわしい性質や品行のそなわったもの、すなわち騎士的本能と洗練された感情とをもったものを意味する。これは今日の紳士の語源をなすとおもわれる意味であるが、このようにつかいかたがすでに一四世紀後半にあらわれていることは興味ふかい。若干の例をあげよう。

(l) そしてたしかに、じぶんのりっぱな名前を維持するために最善の努力をはらわない……かれは、ジェントルマンとよばれるべきではない。 And certes he sholde nat be called a gentil man, that……ne dooth his diligence and bisynesse, to kepen his good name. Chaucer. 一三八六年じゆ。

(m) かくも有徳で、しかもその地位にいて乱暴でな……かれはジェントルです、なぜならば、ジェントルマンにふさわしくおこなうからです。 Who so is vertuous, And in his post nought outrageous …… he is gentil bycause he doth As longeth to a gentleman. Romaunt of the Rose. 一四〇〇年じゆ。

(n) 誠実、慈悲、高潔、勇氣……これら四つの美德のうち、三つをかくものは、けっしてジェントルマンとよばれるべきではない。 Trauthe, pettee, fredome, and hardynesse…… Off thise virtues iij, who lakkyth iij.,

He aught never gentylmane called to be. Reliquiae antiquae. 一四〇〇年代。

かくして、一六世紀初葉までのジェントルマンには、〔Ⅰ〕〔Ⅱ〕〔Ⅲ〕漠然と良家のうまれのものを意味し、そのなか

に貴族（ノーブルマン）をふくむばあい、「Ⅰ」（β）貴族より地位はひくいが、ジェントルマンの象徴たる紋章をもったものを意味するばあい、「Ⅱ」ジェントルマンであつて王族貴族に奉仕するもの、すなわちナイト knight, イスクワイア esquire をふくむばあい、「Ⅲ」家柄だけでなく人柄もりっぱなジェントルマンを意味するばあい、の四つがあることがあきらかとなった。このようなジェントルマンの語義は、一六世紀中葉以降のそれとはあきらかに区別されなければならないのである。従来、ジェントルマンの語義をかんがえるばあい、とかく、一六世紀中葉以降のそののみをとりあげ、それをもって、一六世紀初葉以前のジェントルマン規定に拡張適用するということがおこなわれてきたようにおもわれる。語義をかんがえるばあい、それが歴史とともに変遷するものとして把握することが必要である。たとえば、小松芳喬教授がジェントルマンの語義をとかれるばあいには、一六世紀後半（エリザベス朝）のそれをさしておられることを注意しなければならない。教授は、一五八三年に出版された Sir Thomas Smith の *De Republica Anglorum* と一六〇一年にかいたといわれる Sir Thomas Wilson の *The State of England anno dom. 1600* とを援用されながら、ジェントルマンとは、「（一）良家のうまれのものの総称、そのなかには、国王、皇太子、duke, marquis, earle, viscount, baron, knight, esquier, simple gentleman がふくまれる」（二）貴族下層部 nobilitas minor = knight, esquier, gentleman, lawyer, professor, minister, achdecon, prebend, vicar, （三）simple gentleman = country gentleman, 弁護士、医師、大商人など、（四）country gentleman = squire である」と規定されているけれども、これはあくまで一六世紀中葉以降においてかんがえられる語義である。またトニー R. H. Tawney がその有名な論文 “The Rise of the Gentry, 1558-1640” のなかでのべているジェントルマンも、「市民革命にききたつ二世代」以降のそれである。トニーはいう。「イギリス・ジェントリの地位は法的な差別によってきまつていたのではなく、通念によってきまつていた」ので、「正確な分類をするのに

都合のよいものではない。<sup>(72)</sup>「トマス・スミス卿のことばでいえば、ジェントルマンとはジェントルマンらしく金をつかうひとのことなのである。せつかに定義をしようとした理論家たちにも、この賢明なトートロジー以上の定義に成功したものはほとんどなかった。」<sup>(73)</sup>「しかしこういうあいまいさにもかかわらず、この社会層をみわけけることは困難ではなかった。その構成員の富にはひじょうな差があったし、その両端は不揃いであつたけれども、しかし中核ははっきりとまとまっていた。この中核を構成していたのは、まず、ヨーマン yeomanry よりはうえて貴族 peerage よりはしたの土地所有者と、これにくわえて、かつての貧農のあとをついで、直営地の定期借地人 lessees となつた裕福な借地農 farmers や、あるいはその一族の小作人たち tenants、つぎに、有名な法律家や僧侶 divines や、ときには医者などというような、やはり急激にふえつつあつた専門職業のひとびと、そして裕福な商人たちであつた。商人たちは、おおく地主 landed families の子弟であつたが、もしそうでなくとも、地主の子弟と同様の教育をうけおなじ社交界に出入し、フランスとはちがつてイギリスでは、ふつう、社会的には地主と差別されていなかったのである。このように、いろいろな層をふくみながらまとまつた平民階級上層部 upper layer of commoners の、<sup>(74)</sup>富と権力の急速な増大こそ、当時のひとびとにつよい印象をあたえたものであつた。」角山栄氏は、ジェントルマンを身分上の区別でかんがえるのではなく、富裕なるヨーマンをもふくめてかんがえておられる。「『ジェントリ』を構成した社会層は、中世以来の中小領主<sup>(75)</sup>地主（その基幹は、紋章をもつ家柄のふるい中小貴族、ないしは軍役に奉仕した騎士層から構成されていた）、および新興の上層農民、豪商である。」角山氏のばあいは、一六世紀中葉以降のジェントルマンだけをかんがえられるのではなく、中世以来のそれを志向されているのであるが、まえの定義からわかるように、身分上のジェントリとは本質的にかんけいなく、ヨーマンをもふくめた富農や大商人をすべてジェントリと規定されるのであつて、その概念は一六世紀中葉以降にかんするトーニーのそれとほぼあいひとしいであらう。

角山氏の所論においては、このような概念規定こそは資本主義の成立過程をちからづよくとらえるのに不可欠のものであるが、わたくしのばあいにおいては、トマス・モアの文章中にあるジェントルマンを規定するのが問題であるから、ここでは論外としてよいであろう。

ところで、一六世紀初葉までと中葉以降とでジェントルマン概念にどのような相異があるか、をかんがえてみるのに、前者にはジェントルなうまれのものという規定が一貫して根柢によこたわっている。そして、そのもつともひろい意味では、王族、世襲貴族をふくめた上層階級一般を意味したが、せまい意味では、王族貴族に奉仕する貴族下層で、紋章をもつりっぱな家柄のもの、トーニーの用語でいえば、「ヨーマンよりはうえて貴族よりはした」のものを意味していた。小松教授の分類では、その(一)と(二)とがこれらにあたるといふことができる。これに反し、後者には、前者のほかに、「紋章の点があまりはつきりしていないジェントルマン」<sup>(76)</sup>、すなわち、*simple gentleman* がふくまれている。そのなかには、カントリ・ジェントルマン(スクワイア)、弁護士、医師などの知的職業人、および都市の大商人がふくまれる。このように、ジェントルマンの概念が拡張され、しかもむしろこの拡張部分に重点がおかれるようになったのは、経済上の階級変動と紋章院の放漫ともとづき、ジェントルマン階級におおきな変動が生じたことによるのである。一六世紀中葉以降、富をたくわえたものはだれでもジェントルマンになろうとした。その例を若干あげよう。

(o) かれはうまやに馬を飼ひ、狩猟についてゆこうと決心した。ほかの方法ではジェントルマンになることはできないとかんがえたからである。 *He hath set his minde to keepe horses in stable, and to follow hunting:*

*Thinking that he can not be a gentelman by other wayes. Hollyband, Campo di Fior. 一五八三年。*

(p) わたくしは土地も金ももっています。わたくしの友人がわたくしに充分のこして死んだのです。そこでわたく



しはどんなに費用がかかろうともジェントルマンになるつもりです。I have lande and money, my friends left mee well, and I will be a gentleman whatsoever it cost me. Ben Jonson, Every Man out of His Humor, I. 一六〇〇年。

(b) 富裕な商人は……商人をやめてジェントルマンになった。The rich Tradesman ……… laid the Tradesman down and commend'd Gentleman. Daniel De Foe, The Complete English Tradesman, II. 一七三二年。<sup>(77)</sup>

このような時代には、もはや従来の厳格な定義は実質的なんらの効用もたなくなつてくるのである。したがってジェントルマンの語義をかんがえるばあいには、いづれがただしきかという固定的なかんがえかたは無意義であつて、そのおなじことばのなかに、ふくまれるものがどのように變動したか、その内的構成をつきとめなければならぬ。すなわち範疇と系譜とは区別されなければならないのである。

かくして、モアが執筆した——ないし作中人物ヒスロディがイングランドにわたつた——ころのジェントルマンは、貴族をふくむばあいもあるが、厳格には貴族よりひくく庶民よりはうえの階層のひとをさすことがあきらかとなつた。厳格にいうといつても、なお、そのなかにナイト、イスクワイアをふくむのかいなかという、さらにこまかい問題も生じてくる。たとえば、治安判事に任命される資格において、ジェントルマンは両者からはっきり区別されていた。「かれら〔治安判事〕の資格にかんして、リチャード二世の十三年、St. I, C. 7は、かれらがその土地の有能なナイト、イスクワイア、およびジェントルマンであるべきことをさだめた。ヘンリ五世の治世の条令は、かれらがその州に居住しているべきことを規定した。ヘンリ六世の治世の条令は、かれらが一年に二〇ポンドの価値ある土地をもっているべきことを規定した——財産規定はジョージ二世の治世に一年一〇〇ポンドにひきあげられた。<sup>(78)</sup>」ジェントルマンはナイトおよびイスクワイアにつぐ地位をしめていたのであるが、同時に三者が貴族のしたにある階層と

して同一視されていたこともここにしめされている（貴族が治安判事に任ぜられることもあったが、それは例外的であった）。したがって、かれらをふくめてジェントルマンと称することもひろくおこなわれている。たとえば、コスミンスキー E. A. Kosminsky は、その研究史上劃期をなすといわれた名著 “Studies in the Agrarian History of England in the Thirteenth Century” のなかで、マナとマナとのあいだに境界をひくことの困難なことを指摘して、マナの「かきなりあい」 Overlapping の状態をのべている。マナの領主がそのマナをおおくの領主から保有しているばあいもあり、また領主が他のマナにおける自由借地者 free tenants であることもある。「ときどき、きわめて重要な領主、すなわち聖職者 clerics とナイトとが、他のマナでの保有の代償として、貨幣支払いのみでなく労働賦役に服さなければならぬことがある。……もちろん、これらのジェントルメンは、かれらの労働賦役をじぶんで負担したのではない、しかし、それでもなおそれらはたすことができたのである。」<sup>(79)</sup> ここでは、ジェントルマンは聖職者とナイトとをさしている。このように、ジェントルマンは、貴族と区別されたいえで、なお広狭二義が区別され、ばあいによってそのいずれにもちいられているけれども、ジェントルマン階層というばあいには、あきらかにひろい意味につかわれているということができよう。モアは、ジェントルマン階層という意味でジェントルマンということばをつかっているということができる。<sup>(80)</sup> なお、聖職者とかんけいを厳密に論ずるとなれば、問題はさらに複雑となってくるけれども、聖職者自体にも階層の差があり、またべつの観点から聖職者と俗人とが区別されることがあるということを指摘するにとどめておこう。

ところで、ジェントルマンは、以上であきらかなように、もっぱら一定の社会的地位・身分をあらわすのであって、経済上の階層をしめすものではけつてないことを注意しなければならない。したがって、それが経済的にどのような階層を構成するのか、経済的にどのようなちからをもっているのかという問題は、おのずからべつに検討されなけ

ればならない。しかし封建制経済の研究史において、マナの階級構成の究明は、その重点をおもに農民層において領主やその役人の研究にむけられることがすくないようにおもわれる。<sup>(81)</sup>そしてそれは、封建的土地所有の解体・農民層の両極分解による土地所有階級の変動という問題の重大性にかんがみて、当然のことであるが、ここではこの問題をそのままにして、ジェントルマンの経済的役割が検討されなければならないのである。<sup>(82)</sup>

まえに引用したように、コスミンスキーは、ジェントルマン階層がひとつのマナの領主であって同時に他のマナの自由保有者である例をあげている。かれらは貴族とならんでマナの領主であつたけれども、いうまでもなく貴族領主のような大領主ではなかった。<sup>(83)</sup>一二七九年の Hundred Rolls によれば、そこに記載されているマナ全体のすくなくとも六五%が五〇〇エーカー以下の耕作地しかもたぬ小マナであり、わずか一三%が一〇〇〇エーカー以上の耕作地をもつ大マナであり、一〇〇〇ないし五〇〇エーカーの耕作地をもつ中マナは二二%をしめている。ところが、耕作地面積についてみると、小マナは全体の三〇%以下、中マナもほぼ同率であるが、大マナはおよそ四〇%をしめるのである。<sup>(84)</sup>もちろん小マナのすべてが小領主の手中にあるとはかぎらないけれども、大マナは大領主の所領の特長をそなえ、小マナは小領主のそれをそなえているから、大小マナの比率をもって、大小領主の階級的構成比をほぼ推測できるであろう。ではジェントルマンは、大マナにおいてどのような役割をはたしたのであるうか。文献の制約により、わたくしは大修道院領に限定してそれを一瞥してみたい。ヘンリ八世が修道院を解散する直前、聖職者すべてに初年度献上聖職祿および十分の一税を国王に納入すべき法律をさだめ、この法律を実施するために、全聖職祿の調査をおこなったときの報告「教会財産査定録」Valor Ecclesiasticus を慎重に研究したサヴィン、Savine は、修道院領とジェントルマンとのかんけいについて、つぎのようにのべている。<sup>(85)</sup>「ひとつの例として、ケントのジョン・John ならびにクリストファ Christopher 両ヘイルズ Hales 氏をあげたい。まことに、かれらの地位は単純なものではな

かった。かれらはただにケントのジェントルマンであつた（『教会財産査定録』では *armigeri* とよばれている）ばかりでなく、重要な官吏であつた。すなわち、ジョンは財務裁判所裁判官 *Baron of the Exchequer*、クリストファは法務長官 *Attorney-General* であつた。かれらの重要な役職が修道院の世界での比重をおもからしめたことはうたがないが、それにもかかわらずかれらの修道院とのかんけいは、地方的性格をたもって、ケントにかぎられていた。ジョン・ヘイルズはカンタベリ寺院の代官長 *chief stewardship* で、二六ポンド一三シリリング四ペンスというひじょうに多額の報酬をうけとつていた。クリストファはおなじ修道院の代官 *steward* であつたが、ずっとすくなく、わずか二ポンド一三シリリング四ペンスをうけとつていた。しかしかれはケントにある他の修道院とかんけいがあった。カンタベリの聖アウガスティン僧院でおなじ職をしめ、六ポンド一三シリリング四ペンスの報酬をもらい、またそこでは *Chystett* の私園 *park* の世話をした（四ポンド）。かれはほかにケントの四つの修道院とひとつのカーレッジ——*St. Gregory (Canterbury)*, *Horton (Dover)*, *St. Radegund's (Dover)*, *Cobham*——で代官または代官長をつとめ、一〇ポンドをもらつていた。カンタベリの聖アウガスティン僧院は、ジョンとクリストファおよびかれらの相続人にたいして、*Littleborn* のかれらの土地のことで一〇ポンドという相当な額の地代を支払わなければならなかつた。調査はそれがどういふ種類の地代であるかをしめさない。しかしカンタベリの聖グレゴリと聖ジェームスの女子養老院 *women's hospital* にかんしていえば、ジョン・ヘイルズは領主であつた、そしてその資格で、*Dunston* および *Tannington* のマナにおける修道院保有地の地代をひきあげたのである。ジョンはまた養老院にかけいしたもうひとつの特権をもつていた。すなわち、女小修道院長が死亡するたびにかれは一〇シリリング一・五ペンスの「相続税」*relief* をとる権利をもつていたのである。……『教会財産査定録』から修道院の役人のなかにジェントルマンが何人いたかを判断することは困難である。おおくの役人の名前に、*miles*, *armiger*, *generous*

という語がつけられている、しかしこれがつねに真実であったとかがえてはならない。『査定録』がこれらの称号をつけていない役人のなかにも、ナイトやジェントルマンがいたことはうたがえない。一般的にいつて、'miles', 'armiger', 'generosus' という名称の使用はこの調査ではひじょうにあいまいである。Sir W. Kingston とか Sir E. Baynton のように著名なひとの名前のときでさえ、ついているときもあればついていないときもある。Willinghby, Danby, Fauntleroy, Fitzjames, Sackville というようによく知られた名前には、けっしてあるいはほとんどついていない。かりにわれわれがあたえられた全修道院のなかで『査定録』が 'miles, armiger, generosus' という称号を名前につけている役人全部をかぞえたとしても、ジェントルマン役人の実数の最小限度がわかるだけである。以下の試算においてわたくしは代官のみをかぞえた、そして 'dominus, miles, armiger, magister' の称号をもった代官は、イングランドの各地に散在する州における全体の数の半分であった。<sup>(86)</sup> サヴィンは、かくしてつぎに、修道院と代官の名をあげ、それにつづいていう。「うえの表は一一一人の名前をふくみ、その半数にはすくなくともジェントルマンであることをしめす称号がついている。いうまでもなく、armiger あるいは miles の称号をもっている代官がかならずしも地方の土地所有者ではなく、あるいはまったく土地所有者ではなかったが、かれらはすべて、かれらの習慣と意見ではカントリ・ジェントルマンの階級にぞくしていたし、おおくのものはじつさにその近隣に土地をもっていた。称号をもたない代官でも、その若干のものはうたがいもなくこの階級にぞくしていた。わたくしは miles, armiger あるいは generosus の称号が会計検査官 auditors、収入役、あるいは莊司 bailiffs の名前につけられているのを発見しなかった。いうまでもなく、このことは、ジェントルマンはけっしてそのような役をもたなかったということを意味するのではない、ただあったとしてもきわめてすくなかったということを意味しているにすぎない。……『大旦那』Grand seigneur が代官、とくに代官長をつとめるときには、かれはその法廷義

務をかれの代理者にゆずりわたすことができれば、じぶんではけっしてなきなかつたものである。それでも役職についていれば、スクワイアは修道院所領についてよくしるようになり、修道院の壁のなかでくつろいだ気分になったものである。そしてこれが解散を成功させるのに貢献した原因のひとつであった。<sup>(87)</sup>修道院のなかにおけるジェントルマンの役割はこれだけではなかった。「ジェントルマンは修道院の農民のなかにみいだされる。『教会財産査定録』は農民の名前をほとんどあげていないので、わたくしは、わずかの例しかあげることができない。オックスフォードシヤの Burceator 小修道院の農民のうちの五人はジェントルマン、二人はイスクワイアとよばれていた (Ric. Banaster gentelman, Edw. et Th. Denton gent., Eq. Reece gentelman, Ric. Langeston armiger, Anth. Cope armiger, J. Goodwyn gentylmen)。ベッドフォードシヤ、Merkyate の修道院のかなり多数の農民のなかで、ただひとり Colleshull の教区長所領 rectory を耕作していた Reginald Dygby がジェントルマンとよばれている。サセックス、Battle Abbey のおおくの農民のなかには、J. Toke および Ric. White というただふたりのジェントルマンがいた。いうまでもなく、これは、農民のなかにこれ以上ジェントルマンがいなかったということを意味するのではない、<sup>(88)</sup>というのは、'generosus' という称号が W. Wyatt というようなひじょうに尊敬すべき名前にさえつけられていないからである。」サヴィンはさらにジェントルマン・ファーマーの例を若干あげたあと、「これらジェントルマン・ファーマーの数はおおくなかったが、かれらの存在はわれわれにとって相当興味があふかい。修道院所領におけるかれらの存在は、ジェントリが教会所領の経営上の重要な役割に満足せず、農場でのより活動的な仕事に参加したということをしめしている。解散前でさえ、経済上の主導権は、修道院の所領において相当でいど修道僧 monks からジェントリにうつっていた。<sup>(89)</sup>」とのべている。これは、サヴィンがあげた例（ここでは省略）の年代からもわかるように、一六世紀にはいってからかなりはつきりしてきた現象と断言していいようであり、本稿には直接

かんけいがないけれども、トニーが一六世紀中葉以降についてのべた、あたらしい型のジェントルマンの先駆的存在のひとつであるといっているであろう。ジェントリのこのような新旧型の交替は重要な現象であるけれども、ここではふかいらすることができない。

さて、以上かなりくわしくサヴィンの所論を引用したが、ここであきらかになったことは、ジェントルマンは大マナにおいては領主につかえる代官その他の役人であったということ、しかし同時に小マナの領主であることがおかったということ、これである。かくして、モアがのべたジェントルマンには、大マナの役人であって小領主、あるいは大マナの自由保有者であって小領主というようにいろいろなばあいがあったが、いずれにしてもかれらが小領主であったということにはほとんどまちがいが無い(ただしサヴィンがあつかった時代にもすでに、土地所有者でなくて通念によってジェントルマンとよばれているひとがあつたことは上述のとおりである)。そこで、かれらは貴族(大領主)に準ずるものとして、準貴族といってもよく、また小貴族といってもよい。小松芳喬教授はこの時代のジェントリを準貴族、大塚久雄教授は小貴族と訳されている。<sup>(90)</sup>

ところで、かれらが従僕をかかえていたということはどういうことであろうか。中世において国王や領主が封建家臣 *retainer* をかかえていたということ、そしてその封建家臣をヨーマンといったことは周知のごとくである。「国王や伯爵、そしてあらゆるたぐいの領主たちが、徒歩でしながい騎馬にまたがるヨーマンを恩賞によってめしかえる」<sup>(91)</sup>そして「かれらこそかつて全フランスを畏怖せしめた」<sup>(92)</sup>ものなのである。しかしかれらは、ヘンリ七世の一四九五年(11 Henry VII. C. 25) および一五〇三年(19 Henry VII. C. 14)の封建家臣団解散令によって、解体せしめられた。『ユトーピア』にでてくるヒスロディのイングランド訪問は一四九七年ごろであるから、すでに領主にめしかえられた封建家臣団はひとたび解散せしめられつつあった。そしてモアが『ユトーピア』を執筆したころは、

二度目の解散令が発令されてはやくも一三年をけみしていた。ところで、モアが従僕 *stipator* といったのは、その描写からみて、これら封建家臣団のことであつたであらうとおもわれる。<sup>(93)</sup> ロビンソンは従僕 *stipator* を *sernyge men* と訳している。ラテン語 *stipator* をこのように訳すことはそれほど不当とおもわれないが、これは日本語ではどういふことばにあたるのであらうか。年代のうえであとに属するが、*A Discourse of the Common Weal of this Realm of England, 1581* にも *serving men* のことがべられていて、日本語訳ではそれが兵士と訳されている。<sup>(94)</sup> このように兵士と訳されたほうがわかりやすいこのことは、しかし、当時においてもちいられていたものであらう。ヴィノグラドフ *Paul Vinogradoff* はつぎのようにのべている。「軍事体制と安全性の欠如とは、ひじょうにおおくの武装した従者護衛者 *followers and guards* の一隊をうんだ。なにもものにもまさつて強力な従者 *all-in-all a mighty staff of ministeriales* (ドイツではそうよばれた) が出現した。イングランドでは、かれらは *sergents* および *servants, servientes* とよばれた。*Glastonbury Abbey* では、農場にやとわれた労働者とそのかしら *foremen* のほかに、六六人の *servants* がいた。このような多数が修道院のたいへんな厚遇によってむくいられ、そして修道院は巡礼者の群を日日むかえいれ歓待した。<sup>(95)</sup>」

ところで、モアのいう従僕 *stipator* が封建家臣団であるとして、つぎに疑問となるのは、モアがヘンリ七世の封建家臣団解散令による従僕の解雇についてはひとことものべていないことについてである。かれは封建家臣団の問題をイングランドにかぎらずヨーロッパ諸国に共通な事情としてのべるためにことさらにこれを除外したのであらうか、それとも、モアの執筆が第二回の解散令後一三年も経過したときであり、しかも「睡眠と食事の時間からぬすみとつた」時間でききあげられたために、これはもはやかれの脳裡に想起されなかつたのであらうか。あるいはまた、マルクスは、ジェイムズ・ステュアート *Sir James Stewart* のことを引用しつつ、<sup>(96)</sup> 「いたるところ用もなく邸宅



をみたしていた『封建家臣団の解体によって、無一物なプロレタリア大衆が労働市場になげだされた』とのべて、資本制への移行の序曲としているが、モアはヒューマニストとしての立場から、封建家臣団そのものを準盗人とみることに急であり、したがってその解体を盗人の大量生産とみて、プロレタリア大衆の創造とはかんがえることができなかつたのであろうか。まことに、かれらは領主相互間の私斗への出動、陪審員・原告・被告への威赫、院外団的役割、殺人・強盗など、悪のかぎりをつくしていた。<sup>(98)</sup>ヒューマニストとしての眼には、かれらの解体前と後とに本質的な差異がみとめられなかつたのであろう。

しかし、そのモアも、インクロウジュアによる「農民離村 rural exodus」「荒廃村落 deserted villageの出現」<sup>(99)</sup>の現象のなみなみならぬことをしっていた。マルクスも、これが封建家臣団の解体とは比較にならぬほどおおきな問題であることを指摘している。「大封建領主が、農民を土地——農民が領主自身とおなじ封建的權利名義をもつていた土地——から暴力的にかりたてることにより、また農民の共同地を横奪することによって、比較にならぬほどおおきなプロレタリアートを創造したのである。」<sup>(100)</sup>

いわゆる第一次インクロウジュアに<sup>(101)</sup>かんする研究においてかならず史料として引用されるモアのインクロウジュア論にも、しかしながら、おおくの限界がみいだされる。それは、現在にいたるまでの研究史の量と質とが雄弁にものがたっている。しかしモアを経済分析の視角から論じようとする本稿においては、経済史の立場からその史料としての限界を論ずるのではなく、モアの分析力がどうであつたかという点に焦点をあわせてゆきたい。したがって、研究史そのものがわれわれの問題ではなく、その研究史を前提してモアのインクロウジュア論の分析力をかんがえてゆくのが以下の課題である。

まず第一に、モアにかぎらず当時のインクロウジュア反対論者に共通していわれるのであるが、その規模と範囲に

ついで充分分析的でなかったのではなからうか。もちろんモアは、「ヨリやわらかい・かつそのためにヨリ高価な・羊毛が産出される地方で」というように、範圍を意識して限定している。しかしそれは充分明確だとはいえない。マルクスは、小農民の收奪についてモアとおなじ調子でかたるハリスンの文を引用したあとで、「かの旧年代記の愁歎はつねに誇張されて」<sup>(16)</sup>いることをみとめている。歴史的研究の成果も、それらが Midland Counties を中心とする地域で、しかも断片的にみられることをしめしている。<sup>(17)</sup>もちろん、だからとて、その意義を過少評価することはゆるされない。<sup>(18)</sup>むしろ、一世紀半のあいだに全面積のわずか二・七六%についておこなわれたにすぎないこの現象の経済的社会的意義を、このように明確かつ重大にとらえたということこそ注意されるべきであらう。「それ〔年代記〕は、生産諸関係における革命が同時代人そのものにあたえた印象を正確にしめしている。」<sup>(19)</sup>

つぎに、インクロウジュアを推進したものはだれであらうか、したがってまた、インクロウジュアの性格はどのように規定されるべきであらうか。この点はきわめて根本的かつ困難な問題点であって、にわかに結論をもとめることはできない。なぜならば、これはまさに封建制から資本制への移行期の概念規定と密接にむすびつくからである。モアは、推進の主体を貴族、ジェントルマン、修道院長にもとめているが、たとえば、トニーは資本家的な大借地農にもとめている。<sup>(20)</sup>また、領主を主体とみとめても、その領主が古典莊園的反動的なものであるか近代的ブルジョアのなものであるかについて、いまだその帰結をみない。<sup>(21)</sup>法律家思想家たるモアに、この点についての分析をのぞむことは無理というべきであらう。

ところで、耕地はなぜ牧羊地に転換されたのであらうか。この点についても一致した結論をもとめることはできない。モアはこれを領主の無慈悲な貪欲にもとめているが、まことにその時代の精神的風土は「このように gentleness をうしなった gentleman がこのようにおおかつたことはかつてない」<sup>(22)</sup>といわれたほどの無惨さであったし、「修道

僧もけっきょくは実業家であつた」<sup>(10)</sup>のである。しかしこれだけでは、なぜかれらが耕地をかこいこんで牧場としたかの説明とはならない。これにたいするこたえとして、まず、牧羊経営は羊毛価格の騰貴によって穀作経営より利潤がおおかつたからであるとかれた<sup>(11)</sup>。しかし、やがて、羊毛価格騰貴の事実はない、地味の疲弊こそ眞の原因であるとする説が対立するにいたつた。ところが、これにたいしても、地味枯渴説の根拠とする中世イングランドの小麦收穫量の統計は信頼しがたいとして反駁がなされた<sup>(12)</sup>。だからとて、羊毛価格が小麦価格より有利であつたという主張をうらづけるにたる資料もない。<sup>(13)</sup>かくて帰一すべき結論はいまだえられないけれども、利潤をかんがえるさいに価格とならんで考慮せられるべきもうひとつの要因たる生産費に着目すべきであらう。そして羊毛生産費はこの時期に低下したといつていいようである。<sup>(14)</sup>地味枯渴説もこの側面からのひとつの接近といつていいであらう。したがって、モアが羊毛価格はひじょうに騰貴したといつてゐるのは、インクロウジュアの原因としてのべたのではなく、領主の寡占的政策によつてつりあげられる点を強調したものと解すべきであらう。<sup>(15)</sup>もちろん独占利潤はインクロウジュアへの誘因となるもかんがえられるけれども、モアはこの循環論をかんがえたのではなく、領主のどん欲がインクロウジュアをうみ、そのインクロウジュアが寡占政策を可能ならしめるといふ因果論をかんがえたものであらう。インクロウジュアの原因いかんについてモアののべるところは、経済分析上なんらの意味ももたないが、独占ないし寡占への認識は、シムペーターが指摘するように、特筆すべきものをもっている。

最後に、モアの現状にたいする対策が問題となる。かれは、インクロウジュアを破棄して、農場およびその家屋を再建すること、<sup>(16)</sup>独占を排除すること、農業を復活し毛織物業を復興すること、すなわち、インクロウジュアと独占者とが存在しない社会を理想として提言した。経済分析の結果インクロウジュアと独占者の存在が庶民の困窮の眞に経済的原因であることがあきらかとなるや、これらを排除することは庶民の経済的幸福をもとめる経済政策の当然おも

むくべきところである。しかしさらに一步をすすめて、このような経済政策の目的とするところはなんであるか、モアがこのような政策を主張したことのうらにはどのような究極的目的がふくまれているのであろうか、をとうことになれば、問題はむづかしくなる。これをあきらかにするためには、モアは『ユトープピア』においていかなる社会層を代表しているのであらうかという問題にこたえる必要がある。しかしこの問題に一義的な結論をあたえることは困難であり、<sup>(118)</sup>また経済分析の視角から『ユトープピア』をとりあげる本稿の範囲をはるかにこえることになる。「その点をあきらかにするには、おそらく、フォーテスキューあたりからテューダー初期にいたる政治思想の比較研究が必要になるであらう。すべては課題としてのこされている。」<sup>(119)</sup>

かくして、モアの『ユトープピア』を経済分析の視角からみると、以上のごとくであるということができよう。その分析の不備は上述のように指摘されなければならないが、しかもなお、政治と宗教とのなかに経済的思考がうずもれていた一六世紀初頭にあつて慧眼よく現実社会の経済的側面——本源的蓄積期における失業者の創造——をとらえた功績は、その立場のいかんにかかわらず、みとめられなければならないであらう。モアが「とくべつ慧眼な、とくべつ学問的訓練のある、経済情勢にとくべつあかるい観察者」であつたればこそ、それは可能であつたのである。<sup>(120)</sup>「われわれはおそらくこの時期、すなわち、一六世紀に近代的な経済学があらわれはじめたとかんがえていいであらう。」<sup>(121)</sup>

(10) More, op. cit., p. 50. 訳二六ページ。

(11) More, op. cit., pp. 46—7. 訳二三ページ。

(12) ロビンソン訳では、貴族とジェントルマンとははじめからまったく区別されず、ただジェントルマンの用語のみがもちいられている。したがって、貴族が従僕を解雇するところでは、ロビンソン訳では、ジェントルマンが従僕を解雇するとな

っている。ところで、わたくしが、はじめ本稿をかこうとおもいたった動機についてのべるならば、ひとつには、ジェントルマンが従僕を解雇するというロビンソン訳の叙述につまずいたからであった。ヘンリ七世による封建家臣団の解散がまずおこなわれたあと、一四九七年にはまだかれらが残存していたとかんがえられるが、それはジェントルマンのもとにやとわれている家臣団のみであったのであろうか。貴族のもとにある家臣団も残存していたのではなからうか。もしそうだとすれば、モアの觀察力の鋭敏さが、やがて重要性をおびてくるジェントルマンをこのようににおおきくとらえしめたのであろうか、とかんがえた。ところが、あとになって、わたくしはようやくラブトン版をみる機会にめぐまれ、ラテン原文にあたってみて、それがロビンソン訳のいたずらであることをしつたのである。わたくしが『ユトーピア』をできるかぎりラテン原文によって訳すべきだというのは、このようなつまずきにもおうている。

(63) More, op. cit., p. 50. 訳二五—六ページ。

(64) More, op. cit., p. 52. 訳二六ページ。

(65) Maurice Dobb, *Studies in the Development of Capitalism*, 1946. 京大近代史研究会訳、I、二八—九ページ。

(66) (a) — (d) 、 (f) 、 (g) は N. E. D. からの引用である。

(67) 一三八一年六月一三日の朝、ブラックヒースで大群衆をまえにして John Ball がよびかけたことはといわれるもの。引用者によって綴字はきわめてまちまちであるが、ここでは重藤威夫『英国中世経済の発展過程』一一二ページによる。

(68) これも N. E. D. からの引用である。

(69) 以下の引用はいずれも N. E. D. からである。

(70) 小松芳喬『英国資本主義の歩み』二二—八ページ。

(71) R. H. Tawney, *The Rise of the Gentry, 1558—1640*, 1941, in E. M. Carus-Wilson (ed.), *Essays in Economic History*, 1955, p. 174. 浜林正夫訳一一ページ。

- (72) Tawney, op. cit., p. 175. 訳一二ページ。
- (73) Tawney, op. cit., pp. 175—6. 訳一二—三ページ。
- (74) Tawney, op. cit., p. 176. 訳一三ページ。
- (75) 角山栄『資本主義の成立過程』五ページ。
- (76) 小松芳高、前掲書、二五ページ。
- (77) しかし、もちろん、本来の語義がまったくしなわれたというのではない。その例を若干あげる。
- (r) そなたはジェントルマンのうまれであるけれども、かれらのなかのジェントルさはすりきれてなくなりました。  
 Thou thou be a jantyll man borne, Yet jentylnes in the ys thred bare worne. Skelton, Poems against Gamesche, IV. 一五二九年以前。
- (s) きわめてエウダネースかつゲナイオス、すなわち、まことに高貴な家柄の出で、そのうえ、かれらの例にならざるいはかれらの名をたかめるひとは、合法的にその称号をばこつてよいジェントルマンである。Hee that is so both *Euternes* and *Genevicos* i. both descended from truly Noble Parentage, and withal following their steps, or adding to their Name, is the Gentleman that may lawfully glorie in his Title. John Selden, Titles of Honor, 1614.
- (t) モンテウス公のはかにはたかい身分のひとはひとりもない。他はすべてジェントルマンである。There are no men of quality but the Duke of Monmouth, all the rest are gentlemen. Lady M. Bertie. 一六七一年。
- (u) ビエール・ド・ラ・モットはフランスの有名な家柄からでたジェントルマンであった。Pierre de la Motte was a gentleman descended from an ancient house of France. Mrs. Ann Radcliffe, The Romance of the Forest, I, 1791.
- (v) ジェントルマンとは、法律上とべべつの紋章をつける資格があり、そしてまたこのべた「貴族の」地位のふすれにふく

それなうあらざるひとのことである。Gentlemen are all those who, lawfully entitled to Amorial distinction, are not included in any of the before-mentioned degrees [of nobility]. John E. Cussans, History of Hertfordshire, 1882.

- (78) W. S. Holdsworth, a History of English Law, Vol. I, p. 126. なお治安判事については荒井政治「チューダー朝の治安判事」『社会経済史学』二〇卷三号、Heckscher, Merkantilism, I, pp. 246—53. などを見よ。外国文献については、角山栄『イギリス絶対主義の構造』一九四—五ページをみよ。

- (79) E. A. Kosminsky, Studies in the Agrarian History of England in the Thirteenth Century, ed. by R. H. Hilton, trans. by R. Kish, 1956, p. 77.

- (80) ただ本稿(下)一〇六ページに引用したところにのべているシェントルマンは貴族をふくむひろい概念であるとかんがえても不合理ではない。しかしこのようにひろくもちいているのはこの部分だけであって、他のところではモアは注意ぶかく貴族とシェントルマンとを区別しているということができる。

- (81) コスミンスキーもこのことを指摘している。「大封建土地所有者の大所領からえられた資料にもとづくところのイギリス・マナの伝統的かいしゃくは、『農奴制』のような一定の問題に注意を集中して、おなじように重要な他の問題を排除してきた。とくに農業発展にかんする歴史家たちは政治史家たちがおおくの注意をはらったところのあの独特な社会階層——裕福な自由農 free peasants と小騎士——を無視してきた。」Kosminsky, op. cit., p. 256.

- (82) 農民層分解とシェントルマンとはけっして無かんけいではない。しかし農民層分解そのものについてさえないまだ議論の存するところであって、ここでこれとシェントルマンとのかんけいを論ずることは不可能である。なお農民層分解についてはたとえば、大塚久雄『近代欧洲経済史序説』上の二、同『近代資本主義の系譜』上、同『農民層の分解』に関する基礎的考察、『土地制度史学』創刊号、高橋幸八郎『市民革命の構造』、吉岡昭彦「絶対王制成立期の農民層『分解』」『商学論集』

二三卷五号、角山栄『資本主義の成立過程』、戸谷敏之『イギリス・ヨーロッパの研究』など参照。

- (83) コスミンスキーによれば、小マナは成立の当初から大マナとその性格をことにし、一三世紀においても大マナとはちがった性質をたもち、そして資本主義への移行もずがった経過をたどる。Cf. Kosminsky, op. cit. Ch. V.

- (84) Kosminsky, op. cit. p. 270.

- (85) この調査は一五三五年におこなわれたものであって、あきらかにモアの執筆より一九年、作中の年代より約三八年あとにぞくするが、これについてのサヴィンの研究をとりあげるのは、解散を翻期としてそれ以前半世紀ぐらいのあいだに、マナ役人におおきな変動はなかったとかがえることがゆるされるであらうとかがえただからである。なお「教会財産査定録」にかんするサヴィンの研究については、小松芳喬『封建英国とその崩壊過程』一四六—二〇八ページの研究がある。

- (86) Alexander Savine, *English Monasteries on the Eve of the Dissolution*, Oxford Studies in Social and Legal History, Vol. I, 1909, pp. 256—8.

- (87) Savine, op. cit., pp. 259—60.

- (88) Savine, op. cit., p. 260.

- (89) Savine, op. cit., pp. 260—1.

- (90) たとえば小松芳喬『封建英国とその崩壊過程』の諸所、大塚久雄『近代歐洲經濟史序説』上の二、二五六ページなど。なお『近代歐洲經濟史序説』の旧版二五七ページではジェントルマンとなっていたのを改訂版でこのようにあらためられたのであろう。

- (16) W. Langland, *Piers the Plowman and Richard the Redeless*, ed. by W. W. Skeat, 1888, (c) Passus IV, 270—1. モーメンの語彙とつづきは、戸谷敏之、前掲書、三—二二ページ、M Campbell, *English Yeoman under Elizabeth and Early Stuarts*, 1942, pp. 3—10, App. I; 吉岡昭彦「絶対王制成立期の農民層『分解』」、前掲誌、六一—二二ページをみよ。



- (92) W. Harrison, *Elizabethan England*, ed. by F. J. Furnivall, p. 13.
- (93) しかしデントン W. Denton によれば、封建家臣団の解体を遂行したヘンリ七世をバック・アップしたのはジェントリであるといわれる。Denton, *England in the Fifteenth Century*, 1888, pp. 283—7, 305—6. これによれば封建家臣団をかかえているのは貴族だけであってジェントルマンではない。この点モアの叙述とはあきらかに対立する。
- (94) A Discourse of the Common Weal of this Realm of England, pp. 82, 83, 84, 86, 訳 八八、八九、九〇、九二ページ。なお松村平一郎氏はこれを兵士ではなくて従者とするのが妥当であると指摘される。「書評・出口勇藏監修『近世ヨーロッパの経済思想』』『社会経済史学』二五巻四号、一一〇ページ。
- (95) Paul Vinogradoff, *Villainage in England*, 1892, p. 320.
- (96) ステュアートのことはつぎのようになってゐる。「いたるところ身分のたかいひとの邸宅をもなくみだしていた貴族のおびただしい従者 attendants のうちのおおくは欠乏のためにうえてゐた。」James Steuart, *An Inquiry into the Principles of Political Oeconomy*, Vol. I, 1767, p. 52.
- (97) マルクス『資本』、長谷部文雄訳、青木文庫(4)一〇九八ページ。
- (98) とりあへず、吉岡昭彦『地主制の形成』二九—三〇ページ参照。
- (99) インクローウジュアの語義については Hasbach, *A History of English Agricultural Labourer*, 1908, Appendix I: E. Lipson, *The Economic History of England*, Vol. I, p. 136. 小松芳高『英国資本主義の歩み』四五一—六二ページ。
- (100) たゞせば Richard Henry Tawney, *The Agrarian Problem in the Sixteenth Century*, 1912, pp. 253—65. をみよ。
- (101) マルクス、前掲書、訳一〇九八ページ。
- (102) イギリス農業史において有名なインクローウジュアは、一五世紀七十年代以降一七世紀なかばにいたる牧羊インクローウジュア

経済分析の視角からみたトマス・モア『ユトローピア』(下)

と一八一—一九世紀の耕作改良のための議会的インクロウジュアとのふたつである。一次と二次との対照については、たとえば、Rowland E. Prothero, *English Farming Past and Present*, 1917, pp. 56—7. 参照。第一次インクロウジュアの事例については、小松芳喬『歩み』六三—一〇七ページをみよ。

(10) ャルクス、前掲書、訳一〇九九ページ。

(11) W. J. Ashley, *An Introduction to English Economic History and Theory*, Vol. I Part 2, Chap. IV, pp. 285—8, 305(Map); E. F. Gay, *Incllosures in England in the Sixteenth Century*, Q. J. E. XVII, No. 4, 1903; A. H. Johnson, *The Disappearance of the Small Landowner, Ford Lectures*, 1909, pp. 48 ff., 59 and Map I; Tawney, op. cit., pp. 8—9, 167, 212—63, 405, 416—7; 小松芳喬「第一次インクロウジュアに関する通説の形成過程」『早稲田政治経済学雑誌』一三五、一三九号、同「廃村と第一次インクロウジュア」(野村博士遺稿記念論文集『封建制と資本制』所収)、大塚久雄『序説』二五二、二五七、二五九ページ、吉岡昭彦、前掲書、一三一—四ページなどをみよ。

(106) しかしゲイはつぎのように断定する。「その当時の文献的証拠はすべて慎重に、信用しないように、とりあつかわなければならない。……インクロウジュア運動を体験したひとびとの叙述は不幸にして変化のおおきさや真の社会的結果の『確実な証拠』として容認できない。かれらの洞察はあまりにもかざられており、あまりにも偏狭であり、あまりにも偏見にとらわれている。」Gay, op. cit., pp. 587—8. トーニーはこれを批判する。「ものの道理からかんがえて、数字は信頼できないし、またたとい信頼できるとしても、それが問題にしている変化の社会的結果にかなするものとも重要な疑問に真にこたえるものではないであらう。」「百万を単位として計算したり、経済力のなにかあたらしい爆発のない年にはその年を空費したとおもうわれわれは、経済生活が量的にはかりでなく質的に相異し、大多数のひとびとが一生涯のあいだに百人以上のことになった人間にあらうことがなく、大多数の世帯が曾祖父の型で曾祖父の畑をたがやすことによって生活している時代の運動を測定するにあたっては、統計のつかいかたにひじょうに慎重でなければならぬ。われわれはわれわれの問題にたいしてあ

まりにも器用であつてはならない——われわれの祖先はあまりにもいじわるだといったであらう。われわれは人口の減少量の推計を、その影響の叙述とうけとつてはならない、なぜならふたつのものはひとしい材料から *pari materia* できていないからである。」 Tawney, *op. cit.*, pp. 263—4.

(106) マルクス、前掲書、訳一〇九九ページ。

(107) Tawney, *op. cit.*, p. 217.

(108) 吉岡昭彦、前掲論文、五九—六一ページ註(6)、六九ページ、七一ページ註(4)、(6)、大塚久雄『序説』二四八ページ。

(109) Quoted in: Lipson, *op. cit.*, I, p. 160.

(110) R. H. Tawney, *Religion and the Rise of Capitalism, A Historical Study*, 1926, Pelican Books, p. 144. 出口勇藏・

越智武臣訳、下巻、一—二ページ。

(111) 羊毛価格騰貴説はロジャーズ James E. Thorold Rogers によつて定説化された。「この運動はふたつの原因——国家の一般的貧窮化による資本の欠乏と羊毛の高価格——によつて生まれたものとおもわれる。」 J. E. T. Rogers, *A History of Agriculture and Prices in England, From the Year after the Oxford Parliament (1259) to the Commencement of the Continental War (1793)*, 1882, Vol. IV, p. 63. 「一五世紀の最初の三十年間にあつて羊毛はひじょうにたかい価格であつて、二八ポンドのトドあたり八シリング一ヶ四分の一ペンスであつた。つぎの一〇年間〔一四三—一五四〇〕は、同一量の平均価格が五シリング四ヶ二分の一ペンスである。一五四一年から一五八〇年までの四〇年間は、価格が一七シリング四ペンスである。すなわち価格は三倍以上に上昇したのであつた。したがつて羊毛生産は農業資本のもつとも利潤のおおい用途であつた。」 *do*, *Six Centuries of Work and Wages, The History of English Labour*, 1884, p. 444.

(112) ブラッドリ Harriett Bradley はつぎのように主張する。インクロウジュア運動が羊毛価格の騰貴によつて惹起させられたという主張を確立するためには、この騰貴はインクロウジュア問題が重大化して立法の主題となつた時期よりもまえにおこ  
経済分析の視角からみたトマス・モア『ユトピア』(下)

なわれたことを証明する必要があるのに、その期間に羊毛の価格は騰貴せずむしろ一世紀以上にわたって下落しており、他方小麦の価格が維持されていた。インクローシュアを遂行した領主たちが異常に貪欲であり冷酷であったと信すべき理由はない。土壤の疲弊が一四世紀の貧困、一五、一六、一七世紀のインクローシュアの原因であった。牧羊が比較の有利であったのは旧来の耕地の土壤があまりにも不毛で耕作費用をつぐなわなないからであった。H. Bradley, *The Enclosures in England, An Economic Reconstruction*, 1918.

- (21) Sir William Beveridge, "The Yield and Price of Corn in the Middle Ages," *Economic History, A Supplement of the Economic Journal*, Vol. I, No. 2, 1927; M. K. Bennett, "British Wheat Yield per Acre for Seven Centuries," *Economic History, A Supplement of the Economic Journal*, Vol. III, No. 10, 1935; Lipson, op. cit., I, p. 147n.

- (114) 小松芳喬教授は、羊毛価格騰貴説と地味枯渇説との対立の歴史を説述される論文において、前者の説を復興しようとするボウドン P. J. Bowden の論文をくわしく紹介されているが、そこに転載されているボウドンの統計の操作には根本的な欠陥があるといわざるをえない。すなわちかれは一四九〇——一六一〇年の平均を一〇〇として、羊毛、小麦両価格の指数を作成し、羊毛価格の上昇率は前半のほうが後半よりも大であるのに、小麦価格はおなじ期間について小であるから、羊毛価格はこの前半の期間について小麦価格より有利であったと論じているけれども、この指数から前半における羊毛価格の有利性はみちびきだされない。羊毛価格の上昇率は前半八六%が後半八一%より大であるといっても、それは小麦価格の前半の上昇率一四七%にはるかにおよばないのである。小松教授の論文はボウドンにたいする批判者 J. F. Wright, S. Pollard をふくめたおおくの学者の第一次インクローシュアの原因にかんする説を紹介する。小松芳喬「第一次インクローシュアの原因」『早稲田政治経済学雑誌』第一四二、一四五号。

- (115) 羊毛価格の騰貴をインクローシュアの原因とかがえることは一般にみとめられていない。Hasbach, op. cit., pp. 36—7; Johnson, op. cit., p. 56 n. 2; Lipson, op. cit., I, pp. 146—8.

(116) 大塚久雄『序説』二四八ページ、二五〇ページ註(3)。

(117) 大塚久雄教授は、モアの叙述の意味は生産費の低下にもかかわらず価格がほとんどおなじ水準にあったということ、すなわち相対的騰貴という意味であると解され、インクロージュアの原因をのべたものとされている。しかしこの意味での相対的騰貴がなぜ中小毛織物業者をくるしめることになるのであろうか。そういうるためには、羊毛価格と他の商品価格との比較がなされなければならないであろう。大塚久雄『序説』二五〇ページ註(3)参照。

(118) 農民の農地と家屋をひきたおしたものはそれを再建すべしというモアの文章は、ヘンリ七世の第七年の法律(7 Hen. VII, C. I.)の文言とはとんとおなじである。しかしモアはこの対策に法律がインクロージュアを禁ずるにたるといふようにあ

まくながえてはいなかった。More, op. cit., Introduction by Lupton, xxxvi—xxxvii.

(119) わが国におけるモア研究家たる松田寛、田村秀夫、水田洋諸氏のかいしゃくもけつして一致していない。まえの註でふれたように、テューダー政府もまたインクロージュアを禁止するのであるが、それはモアがテューダー絶対王権の立場にたつことを意味するのではない。絶対王制の立場からインクロージュアを禁止したのは、食料の不足と農民の失業とによる社会不安の醸成をおそれたからでもあるが、また大陸諸国のごとく常備軍をもたない国王にとって土地保有農民(ヨーマンリ)は州義勇軍 shire levies の補給源であり、また臨時直接税 subsidy をつうじて国王の財政の一支柱でもあったからである。Tawney, Problem, pp. 342—7. しかし政府の努力はインクロージュアを禁じてしまうほどの成果をあげなかった。「それは経済的変動を完全にくいとめることはできなかったけれどもおくらせた。それは急激な運動のショックをいくらか緩和するブレイキの役割をはたした。」Tawney, op. cit., p. 381.といわれる程度のものであった。しかし絶対王制政府の農民にたいする態度は矛盾にみちていた。「たしかに絶対政府は農業の保護奨励をおこなったといえるけれども、農民の立場にたっていたということはできない。むしろ、地主的立場にたっていたようにおもわれる。」角山栄『成立過程』一二七ページ。

- (120) 水田洋「サー・トマス・モアと社会主義」、前掲誌、六五ページ。
- (121) カウツキー、前掲書、訳三一八ページ。
- (122) Edwin Cannan, *A Review of Economic Theory*, 1929, p. 5.